

いわゆる育児不安に関する調査研究(2)

—最新版質問紙による「育児困難感」の規定要因に関する研究—

恒次 欽也・庄司 順一・川井 尚

Kinya TSUNETSUGU・Junichi SHOJI・Hisashi KAWAI

(特殊教育教室) (日本子ども家庭総合研究所) (日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所)

I 研究目的

昨年度、いわゆる育児不安—育児困難感を規定する要因に関する研究を報告した(文献8)。また、今年度、新たに昨年度の質問紙を0歳児、1歳児、2歳児、3歳から6歳児の4つの年齢段階ごとに再構成したものを作成し、それに基づいて「子ども総研式育児支援質問紙」(試案)を作成した(文献6)。現在、これの臨床的な妥当性を検討するために、小児科外来、保健センター等の乳幼児健康診査などの場において資料を収集しているところである。

この「子ども総研式育児支援質問紙」は上に述べた4つの年齢段階ごとに作られている。質問紙に回答を求めた後に、検査者は各領域ごとの粗点を算出する。この粗点に基づいて1から5点に分布する標準得点(SS)に換算する。この得点は高くなるほど、ネガティブになるように構成してある。各領域の標準得点からプロフィール図を作成するようになっている。

なお、育児困難感に関わる領域は0歳児のみ1種類であるが、他の年齢は育児困難感IとIIとに分かれているのでAとBにわけ、それぞれタイプIとIIに対応している。プロフィールの見方は育児困難感(IでもIIでも)がSS4点ないし、5点であった場合、心理相談をすすめることが望ましい。とくに5点である場合は要注意である。また、育児困難感得点が高く、かつ、他の尺度のSS得点、たとえば、母親の(不安)抑うつ、夫・父親・家族機能のSS得点が高い場合にはとりわけ注意深い母親面接が必要になる。といったように活用することができる。

昨年度、旧資料に基づいて「育児困難感」を規定する要因の分析を行い、ある程度の知見を得ることができた。

本報告の目的は、今回の4年齢段階に区分した最新の資料に基づき、育児困難感を規定する要因の分析をあらためて行うことである。そして、臨床的な活用を図るための資料を得ることにある。

II 研究方法

1 調査項目の選定

これまでの論文に用いた調査項目より得られた知見を再検討し、更に児の年齢区分を発達的な相違を考慮に入れて0歳児、1歳児、2歳児、3歳—6歳児(3歳以上)の4段階に分け調査項目を選んだ。

調査項目は次のように分けた。1. 育児に関する項目(0歳児版12項目、1歳児版14項目、2歳児版15項目、3歳以上版15項目)、2. 妊娠、出産後の精神症状に関する5項目(全年齢共通)、3. 父親に関する項目(0歳児版16項目、1歳児版17項目、2歳児版15項目、3歳児版15項目)、4. 家庭機能に関する項目(0歳児版7項目、1歳児版9項目、2歳児版8項目、3歳児版8項目)、5. 母親と子どもに関する項目(0歳児版5項目、1歳児版5項目、2歳児版7項目、3歳児版8項目)、6. 子どもの問題に関する項目(0歳児版10項目、1歳児版12項目、2歳児版9項目、3歳児版14項目)、7. 母親の心の状態に関する項目(0歳児版12項目、1歳児版9項目、2歳児版9項目、3歳児版9項目)、8. 父親の心の状態に関する項目(0歳児版11項目、1歳児版7項目、2歳児版11項目、3歳児版11項目)、9. 生後半年までの乳児の特徴に関する7項目(全年齢共通)である。まとめると、0歳児版は85項目、1歳児版は85項目、2歳児版は86項目、3歳児版は92項目である。これに加えて全年齢共通に母親、父親、児の年(月)齢、子どもの性、同居家族、日中の主な養育者、母親の仕事、妊娠・出産時の異常の有無、妊娠週数、出生体重である。

2 調査対象

対象は、0歳児を持つ母親742名内有効標本638名(男児54.0%、女児46.0%)、1歳児530名内有効標本452名(男児51.8%、女児48.2%)、2歳児318名内有効標本226名(男児51.1%、女児48.9%)、3歳児以上1258名内有効標本1245名(男児50.4%、女児49.6%であり、3歳児285名22.9%、4歳児335名26.9%、5歳児398名32.0%、6歳児227名18.2%)、計2848名有効標本2561

名である。性別は男児1315名(51.4%)、女児1246名(48.6%)であった。母親の就労は、0歳児フルタイム12.7%、パートタイム5.7%、自営3.3%、主婦66.1%である。1歳児フルタイム23.6%、パートタイム10.4%、自営2.9%、主婦61.1%であった。2歳児ではフルタイム30.1%、パートタイム8.4%、自営4.9%、主婦51.1%、3歳以上ではフルタイム21.0%、パートタイム12.2%、自営5.5%であり、主婦は57.7%であった。若干の異同はあるものの属性は昨年度調査とほぼ一致していた。

3 調査方法

調査地域は、北海道札幌市、秋田県由利郡、東京都区内、神奈川県海老名市、千葉県佐倉市、愛知県豊橋市、同刈谷市、山梨県、高知県南国市、沖縄県平良市である。調査場所は乳幼児健診、保育所、幼稚園、小児科外来などであり、回収方法は健診ではその場ないしはあらかじめ郵送し健診時に回収、保育所、幼稚園は園を通して配布回収した。回収率は、各年齢ともにおおよそ75%である。

4 整理方法

上に述べた方法によって得られたデータについて、

①全調査項目を主成分分析(バリマックス回転)を行った。その際に、各項目はネガティブな反応ほど得点を高くするために(表3-1から4まで、Rの付いた項目)スコアを逆転して入力した。なお、今回、因子分析でなく主成分分析を行ったのは因子分析では相関行列の計算処理上に問題が生じたためである。ただし、今回の目的には主成分分析であっても何ら問題がないので用いることにした。計算処理はSPSS for Windows v9.0Jを使用した。

②主成分分析の結果は表1に示す通りである。各主成分を構成する項目群の単純加算を求め、それを得点とした。上に述べたように得点が高いほどネガティブになる。なお、この結果の詳細は文献6を参照されたい。

③昨年度とは異なって、今年度資料では「育児困難感」は0歳児ではタイプI、その他の年齢群はタイプIとIIとに分かれた。そこで、各タイプを従属変数、他の要因を説明変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)をおこなった。なお、0歳児でタイプIと称しているのはそれを構成する項目群が他のタイプIと類似しているからである。また、各年齢のタイプIIも内容的にはほぼ同じものといえる。

「育児困難感」を構成する質問項目群は表3-1から4に示した。表内の項目名のRは逆転項目をI1は領域1(育児に関する項目の1)を示している。

また、重回帰分析で問題となることの多い多重共線性の問題は認められなかった。また、分散分析においても回帰分析に支障のないことを確認した。

④重回帰分析の結果、意味のある説明変数となりえた因子のみそれを構成する質問項目のリストをあげた。(表2-1)

III 結果と考察

1 0歳児の重回帰分析—育児困難感I

0歳児では第5成分「育児困難感I(心配・困惑・不適格感)」を従属変数、他の4成分を説明変数として分析を行った。その結果、モデルは3つ抽出され、相関比が最も大きかったモデル3を採用した。これを構成するのは第2成分「母親の不安・抑うつ傾向」標準化係数.481、第3成分「Difficult Baby」同.195、第1成分「夫・父親・家庭機能の問題」.109であった。したがって、第4成分「夫の心身不調」は除かれた。

育児困難感—「育児に自信が持てない」「子どものことでどうしたらよいかわからない」「どのようにしついたら良いかわからない」(表3-1)など育児に対する心配・困惑・不適格感がそこにはみられる。この育児困難感に最も大きな影響をもたらしているのは「母親の不安・抑うつ傾向」である。これは表3-1に示したように「気が滅入る」「不安や恐怖感におそわれる」「悲観的である」「とても心配性であれこれ気に病む」「精神的に不調」などの項目群からなりたっている。対象となっている母親たちは赤ちゃんを産んで1年内であり、出産後のマタニティ・ブルーズなどの影響も考えられる。生後半年以内と以降とを分けて分析する必要があるかもしれない。

第3成分の「Difficult Baby」—よく泣いてなだめにくい」「わけも分からず泣く」「あまり眠らない」などの育てにくい、取り扱いの難しい子ども—もまた一要因となっているが、子ども側の気質が「育てにくい、取り扱いの難しい赤ちゃん」である場合、母親はとまどい、自分の育児が誤っているのではないか、子育てに自信が持てなくなり、不安感に陥り、抑うつ感情にとらわれがちである。こうした抑うつ感情は子どもへの虐待との関係が指摘されているところであり、要注意である(文献7)。

さらに第1成分「夫・父親・家庭機能の問題」は「夫は私や子どものためによくしてくれる(R)<逆転項目以下同じ>」「夫は精神的に私を支えてくれる(R)」「父親としての自覚が足りない」「夫は子育ての大変さなど私の苦労をわかっていない」などから構成されている。これは夫を中心とした家庭機能が不全であるとき母親の子育てを困難にするということである。これはサイコ・ソーシャル・サポートの必要性を示したものと見て注目すべき結果である。

表1 成分命名リスト

0歳児
第1成分：夫・父親・家庭機能の問題
第2成分：母親の不安・抑うつ傾向

第3成分：Difficult Baby 第4成分：夫の心身不調 第5成分：育児困難感I（心配・困惑・不適格感）
1歳児 第1成分：夫・父親の役割問題 第2成分：夫の心身不調 第3成分：育児困難感I（心配・困惑・不適格感） 第4成分：Difficult Baby 第5成分：育児困難感II （ネガティブな感情・攻撃衝動性） 第6成分：母親の抑うつ傾向 第7成分：家庭機能の問題
2歳児 第1成分：夫・父親・家庭機能の問題 第2成分：夫の心身不調 第3成分：母親の不安・抑うつ傾向 第4成分：Difficult Baby 第5成分：育児困難感I（心配・困惑・不適格感） 第6成分：育児困難感II （ネガティブな感情・攻撃衝動性）
3歳児 第1成分：夫・父親の役割問題 第2成分：育児困難感I（心配・困惑・不適格感） 第3成分：Difficult Baby 第4成分：母親の抑うつ傾向 第5成分：家庭機能の問題 第6成分：夫の心身不調 第7成分：育児困難感II （ネガティブな感情・攻撃衝動性）

2 1歳児の重回帰分析

2-1. 育児困難感I（心配・困惑・不適格感）

第3成分「育児困難感I」を従属変数、他の6成分を説明変数として分析を行った。その結果、相関比が、506ともっとも大きかったモデル4を採用した。説明変数として有効であったのは、第5成分「育児困難感II」標準化係数.596、ついで、第6成分「母親の抑うつ傾向」同.126、第2成分「夫の心身不調」同.100、第4成分「Difficult Baby」同.071の4つであった。第1成分「夫の役割」、第7成分「家庭機能の問題」は除かれた。

最も有効である要因は第5成分「育児困難感II」であったが、これはタイプIが「心配・困惑・不適格感」であるのに対してタイプ2は「(子どもへの)ネガティブな感情・攻撃衝動性」であるが、タイプ2が1の原因となっているというよりも相互に深い関係があり、それは相互に影響し合うものであろう。

次の第6成分「母親の抑うつ傾向」は「心配性であれこれ気に病む」「何事にも敏感に感じすぎてしまう」「楽天的でよくよ考えない」「悲観的になりやすい」であり、育児の不全感や自分の母親としての不適格性を高める要因となっている。もともと育児がうまくい

かないことが母親のこうした抑うつ傾向を高めることになっているとも考えられるので、従属、独立の変数関係は逆転しているかもしれない。他方ではもともと母親自身が性格的に抑うつ傾向の強い人であれば、あるいは乳児期からの「不安・抑うつ傾向」をそのまま維持しているならば、母親の困難感を高める要因となると考えられる。

2-2. 育児困難感II（ネガティブな感情、攻撃衝動性）

第5成分「育児困難感II」を従属変数、他の6成分を説明変数として分析を行った。その結果、相関比が、523ともっとも大きかったモデル2を採用した。説明変数として有効であったのは、第3成分「育児困難感I」標準化係数.576、ついで、第6成分「母親の抑うつ傾向」同.246の2つであった。残りの4成分は除外された。

育児困難感Iとの関連は上記に述べたことと同じである。

第6成分の「母親の抑うつ傾向」がここでも現れたが、これがタイプ2のような「(子どもへの)ネガティブな感情・攻撃衝動性」と結びつくとしても指摘したように母親はこうした衝動性を抑制できず、子どもへの虐待という形で行動化していく恐れが高いという点でこの両者のSS得点が高い場合には、格別の注意を払う必要がある。

3 2歳児の重回帰分析

3-1. 育児困難感I

第5成分「育児困難感I」を従属変数、他の5成分を説明変数として分析を行った。その結果、相関比が、513ともっとも大きかったモデル3を採用した。説明変数として有効であったのは、第3成分「母親の不安・抑うつ傾向」標準化係数.380、第6成分「育児困難感II」同.327、第1主成分「夫・父親・家庭機能の問題」同.173である。除外されたのは第2成分「夫の心身不調」、第4成分「Difficult Baby」である。

第3成分「母親の不安・抑うつ傾向」は「心配性であれこれ気に病む」「悲観的である」「何事にも敏感に感じすぎてしまう」などから構成されている。これも2-1で指摘したのと同様のことが考えられる。

第1成分「夫・父親・家庭機能の問題」は「夫は私や子どものためによくしてくれる(R)」「夫は精神的に私を支えてくれる(R)」「育児のことで相談にのってくれる(R)」などから成り立っている。これも上に述べたとおりであるが、夫や家庭機能の問題は母親の子育てを支える重要なものでこれまでのわれわれの父親研究でも指摘してきたところでもある。

3-2. 育児困難感II

第6成分「育児困難感II」を従属変数、他の5成分を説明変数として分析を行った。その結果、相関比が、462ともっとも大きかったモデル2を採用した。説明変数として有効であったのは、第3成分「母親の不安・抑うつ傾向」標準化係数.388、ついで第5主成分「育児困難感I」同.365であった。他の3成分は有効な説明変数とはならなかった。

第3成分及び第5成分は上で述べてきたことの繰り返しになるので省略する。

4 3歳以上の重回帰分析

4-1. 育児困難感I

第2成分「育児困難感I」を従属変数、他の6成分を説明変数として分析を行った。その結果、相関比が、568ともっとも大きかったモデル4を採用した。説明変数として有効であったのは、第7成分「育児困難感II」標準化係数.583、第4成分「母親の抑うつ傾向」同.165、第1成分「夫・父親の役割問題」同.104、第3成分「Difficult Baby」.072であった。除かれたのは第5成分「家庭機能の問題」、第6成分「夫の心身不調」の2つだった。

いずれもこれまでに述べてきたことと変わりがなく、ここでは第5成分の「家庭機能」が外れていたことに触れたい。主成分分析を行うと、「夫・父親の役割問題」とこの「家庭機能」はひとまとまりになる場合と、二つに分かれる場合とがある。これがなぜそうなるかは不明であるが、家庭機能よりも夫・父親の役割問題の方が負荷量が高くなる傾向があり、同一成分になる場合でも後者の方が主たる構成要素になっていることが多い。これは夫・父親の役割機能の中に家庭機能が含まれる部分があるためとも思われる。

4-2. 育児困難感II

第7成分「育児困難感II」を従属変数、他の6成分を説明変数とする分析を行った。その結果、相関比が、580ともっとも大きかったモデル3を採用する。説明変数として有効であったのは、第2成分「育児困難感I」標準化係数.571、第4成分「母親の抑うつ傾向」同.245、第5成分「家庭機能の問題」同.056であり、残りの3成分は除外された。

ここでは「家庭機能の問題」がはじめて規定要因としてあがってきた。これは「家庭の中がしっくりいかない」「何かと家庭内にもめ事が起こる」「家族の中で私だけが辛い思いをしている」「家族は子育ての大変さを理解していない」などから構成されている。これは子どもの年齢も3から6歳児ということで0歳や1歳児群などと比べてきょうだいやその他の家族（祖父母など）がいることが多くなり、家庭内での母親の役割が複雑多岐に、質的にも、量的にも負担が重たくなっ

てきていて、その中での母親の孤立感や負担感が反映しているものと思われる。標準化係数が小さいのであまり強調しない方が適当であると思うが、やはり、注意事項であると考ええる。

5 育児困難感の規定要因

5-1. 全体を通じて

以上にみてきたことから育児困難感の規定要因について全般的に考えたい。

表2-1に有効な説明変数のリストをあげた。これによると育児困難感（タイプに関わりなく）に影響を与えている要因は母親の精神状態（不安・抑うつ傾向ないし抑うつ傾向）や夫・父親の問題や家庭機能の問題、そして子どもの気質（Difficult Baby）、この3つに集約されるといえる。

第1の母親の精神状態は他の要因からの影響を受けやすいだけでなく、母親の性格に起因しているところもあると推測される。つまり落ち込みやすいとか、不安の強い性格や神経症的などである。これらが育児を自ら難しくしてしまうということがある。

第2の夫・父親、家庭機能の問題は母親を支える機能であり、母親が安心して子育てをしていくための必須の要件といえる。これが機能しないと子育ては危機的になると予想される。この問題では父親（夫）役割をいかに高めていくかが課題となる。そのために保健指導や育児相談の場において父親面接が必要となることがあるだろう。

第3に子どもの気質は早期からの母子関係の形成を困難にするものとして重要である。この問題は比較の見逃されやすいもので、母親は自分のせいでこの子はこのようになってしまったと思いがちである。ときには周囲から子育てに問題があるとか、愛情不足などと指摘されて、余計に自信を失ったり、不安に駆られたりするものである。子ども側にも取り扱い難さがあることを指摘することで母親は安心することができ、適切に対応できるようになったり、ゆとりを持って接することができるようになることが育児相談をしていると経験的によくみることができる。

育児相談を受ける場合には、これらの要因が育児困難のタイプIまたはII、ときには両方に影響を強く与えているものと予想しておく必要がある。したがって、母親の訴えに注意深く耳を傾けることは当然のことであるとして、この3つのポイントに関してより一層の配慮を払うようにしなければならない。

筆者は子どもを虐待してしまうという母親面接の中で母親に抑うつ状態が認められ、精神科受診、投薬により安定した事例を経験している。また、父親（夫）の役割は重要であり、父親面接が有効である。

表2-1 有効な説明変数リスト

<p>0 歳児 <育児困難感 I></p> <p>第1成分：夫・父親・家庭機能の問題 第2成分：母親の不安・抑うつ傾向 第3成分：Difficult Baby</p>
<p>1 歳児 <育児困難感 I></p> <p>第2成分：夫の心身不調 第4成分：Difficult Baby 第5成分：育児困難感 II (ネガティブな感情・攻撃衝動性) 第7成分：家庭機能の問題</p>
<p>1 歳児 <育児困難感 II></p> <p>第3成分：育児困難感 I (心配・困惑・不適格感) 第6成分：母親の抑うつ傾向</p>
<p>2 歳児 <育児困難感 I></p> <p>第1成分：夫・父親・家庭機能の問題 第3成分：母親の不安・抑うつ傾向 第6成分：育児困難感 II (ネガティブな感情・攻撃衝動性)</p>
<p>2 歳児 <育児困難感 II></p> <p>第3成分：母親の不安・抑うつ傾向 第5成分：育児困難感 I (心配・困惑・不適格感)</p>
<p>3 歳児 <育児困難感 I></p> <p>第1成分：夫・父親の役割問題 第3成分：Difficult Baby 第4成分：母親の抑うつ傾向 第7成分：育児困難感 II (ネガティブな感情・攻撃衝動性)</p>
<p>3 歳児 <育児困難感 II></p> <p>第2成分：育児困難感 I (心配・困惑・不適格感) 第4成分：母親の抑うつ傾向 第5成分：家庭機能の問題</p>

5-2. 昨年度との比較

昨年度の有効な説明変数リストを表2-2に示した。これと表2-1を比べると子どもに関する要因が昨年度にはみられたが、今年度はみられないことである。昨年度との違いは質問領域は同じであるが、昨年度の分析を受けて項目数を減らしたことで、年齢群を3群から4群に分けたこと、分析方法を因子分析から主成分分析に変更したこと、などがその原因として考えられる。ただし、一致点としては「母親の抑うつ傾向」「Difficult Baby」(扱いにくい子どもを含む)、「家庭機能の問題」が上がってきていることである。

これらは上に述べた3つの要因と重なり合うところがある。したがって、育児困難感に影響を与える基本的な要因として考えて良いと思う。

表2-2 昨年度研究から重回帰分析による有効な説明変数リスト

<p>0 歳児</p> <p>第3因子：Difficult Baby 第4因子：育児困難感(純粹)☆ 第5因子：母親の抑うつ傾向★ 第7因子：子どものネガティブ感情・態度 第9因子：子どもへの気がかり★</p>
<p>1-2 歳児</p> <p>第2因子：育児困難感☆ 第5因子：母親の抑うつ傾向★ 第6因子：家庭機能の問題◎ 第8因子：子どもへの気がかり★ 第9因子：妊娠・産褥期の問題</p>
<p>2-6 歳児</p> <p>第2因子：育児困難感☆ 第5因子：母親の抑うつ傾向★ 第6因子：家庭機能の問題◎ 第7因子：扱いにくい子ども 第10因子：気になる子ども(子どもへの気がかり)★</p>

注：★3年齢群共通 ◎1-2歳, 2-6歳共通

6 まとめ

近年、筆者の関わっている保健センター等の育児相談や乳幼児健診の際に、育児の悩み、不安、自信喪失を訴える母親の相談が増えている。また、子どもを虐待してしまうという相談も受けることがある。上に述べたように、こうした母親を支援していくために、われわれはここ数年、育児不安に関する研究を行ってきた。そして「子ども総研式育児支援質問紙」(試案)を作成、現在、臨床活用を試行し始めたところである。今回の分析を通じて、同質問紙によって描かれるプロフィールを解釈していく上で、各年齢群においてどのような要因が育児困難感を助長するかという知見が今回の分析により、ある程度得られたことである。たとえば、3歳児で育児困難感IのSS得点が高いときにはほかの領域、上に述べたような3つ領域のSS得点の高低をみながら面接をすすめていったり、親を理解し、子育てを支援していくための資料が得られるとだろう。この質問紙の活用により育児相談、育児支援の方策を考えていくことができるものと思う。

今後は、子どもの属性(乳児期では6ヶ月未満, 1歳未満に, 3歳児以上も3歳, 4歳, 5歳, 6歳と分けたり, 性別や一人っ子かどうかなどによって)や母親の属性(就労の有無など)に基づく分析をとおして細かな解釈が可能になるように検討を重ねていく

い。

さらに、本質問紙を縦断的に利用していくことも考えたい。

謝 辞

本研究をすすめるに当たりご協力いただいた日本小児保健協会発育委員をはじめ、各地の小児科、保育園、幼稚園の先生方、そしてお母さんたちに深く謝意を表したい。

文 献

- 1) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也：育児不安に関する基礎的研究。日本総合愛育研究所紀要, 30集, 27-39, 1994.
- 2) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究—幼児の母親を対象に—。日本総合愛育研究所紀要, 31集, 27-42, 1995.
- 3) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究II—育児不安の本態としての育児困難感について—。日本総合愛育研究所紀要, 32集, 29-47, 1996.
- 4) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村 敬・恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究III—育児困難感の Assessment 作成の試み—。日本総合愛育研究所紀要, 33集, 35-56, 1997.
- 5) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中中村 敬・恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究IV—育児困難感のプロフィール評定試案—。日本子ども家庭総合研究所紀要, 34集, 93-111, 1998.
- 6) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中中村 敬・恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究V—育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成—。日本子ども家庭総合研究所紀要, 35集, 印刷中, 1999.
- 7) 齋藤 学：家族の闇を探る, NHK人間大学, 1998.
- 8) 恒次欽也・庄司順一・川井 尚：いわゆる育児不安に関する調査研究(1)—「育児困難感」の規定要因に関する研究—。愛知教育大学研究報告, 第8輯(教育科学), 123-129, 1999.

表3-1

主成分分析と信頼性分析 (α 係数)

0歳児 (有効数 n=516)
第1成分: 8.950 (10.529%) : $\alpha=0.9240$
21項目 (夫・父親・家庭機能の問題)
3-1-06: 夫は私や子どものためによくしてくれる (R), 790
3-1-03: 夫は精神的に私を支えてくれる (R), 756
3-2-4: 父親としての自覚が足りない, 728
3-1-10: 夫は子育ての大変さなど私の苦勞をわかっていない, 722
3-1-09: 家庭内に関する事柄について夫には期待できない, 708
3-1-05: 育児のことで相談にのってくれる (R), 703
3-2-2: 夫は子どもとよく遊び面倒見がよい (R), 666
3-1-02: 夫と気持ちが通じ合っている (R), 640
3-2-1: 夫は子どもに関心がない, 621
3-1-07: 夫は仕事や趣味だけに打ち込んでいる, 604
3-2-3: 夫は子どもをどのように扱ったらよいかわからない, 600
3-1-08: この人と結婚して幸せである (R), 595
3-1-01: 夫と話し合う時間が少ない, 520
4-06: 家族は子育ての大変さを理解してくれない, 517
4-07: 家族は私の趣味や仕事を理解し協力してくれる (R), 497

4-04: 家庭としてまとまりを感じる (R), 462
3-2-5: 子どもは父親になつていない, 455
4-01: 家庭の中がしっくりいかない, 450
2-02: 妊娠中, 夫や家族の協力が得られなくて大変だった, 429
3-1-04: 夫は家事や育児に消極的である, 424
7-05: M幸せな気分でご過ごしている (R), 421
第2成分: 6.714 (7.899%) : $\alpha=0.9010$
12項目 (母親の不安・抑うつ傾向)
7-07: M気が滅入る, 783
7-11: M不安や恐怖感におそわれる, 763
7-02: M悲観的である, 753
7-10: Mとても心配性であれこれ気に病む, 696
7-03: M精神的に不調である, 695
7-06: M何ともいえず淋しい気持ちにおそわれる, 670
7-12: Mいても立ってもいられないほど落ち着かない, 647
7-09: M何事にも敏感に感じすぎてしまう, 631
7-04: M怒りっぽい, 568
7-01: Mイライラしている, 562
7-08: M楽天的でよくよ考えない, 541
2-05: 出産後気持ちが沈みおっくうで何もする気がしなかった, 413
第3成分: 4.485 (5.277%) : $\alpha=0.8511$
8項目 (Difficult Baby)
9-02: Bよく泣いてなだめにくい, 832
9-04: B訳も分からず泣く, 761
9-01: Bあまり眠らない, 750
9-07: B抱っこや外に連れ出すなど寝るまでに手がかかる, 703
9-06: B一晩に何回も起こされる, 688
9-03: Bおとなしく手が掛からない (R), 622
9-05: B一日の生活リズムが一定しない, 588
6-03: 夜泣きがひどい, 551
第4成分: 4.022 (4.732%) : $\alpha=0.8331$
9項目 (夫の心身不調)
8-08: F精神的に不調である, 750
8-06: Fイライラしている, 661
8-09: F精神的にゆとりがない, 683
8-05: F沈みがち, 691
8-07: F悲観的である, 620
8-01: F眠れない, 483
8-04: F淋しい, 522
8-10: F仕事があまくいつてない, 494
8-11: F仕事に行きたがらなかつたりやる気を失っている, 415
第5成分: 3.760 (4.424%) : $\alpha=0.8358$
8項目 (育児困難感 I <心配・困惑・不適格感>)
1-01: 育児に自信が持てない, 698
1-12: 子どものことでどうしたらよいかわからない, 634
5-05: どのようにしついたらよいかわからない, 600
5-04: 子どものことは理解できている (R), 598
1-05: 母親として不適格と感じる, 598
1-11: 私は子育てに困難を感じる, 592
1-04: 子どもをうまく育てている (R), 557
1-02: 育児についていろいろ心配なことがある, 425
表3-2
主成分分析と信頼性分析 (α 係数)
1歳児 (n=395)
第1成分: 7.874 (9.264%) : $\alpha=0.9123$
17項目 (夫・父親役割問題)
3-1-06: 夫は私や子どものためにとってもよくしてくれる (R), 777
3-1-05: 育児のことで相談にのってくれる (R), 749
3-1-07: 夫は仕事や趣味だけに打ち込んでいる, 736
3-1-03: 夫は精神的に私を支えてくれる (R), 720
3-2-4: 父親としての自覚が足りない, 709
3-1-09: 家庭内に関する事柄について夫には期待できない, 709
3-1-10: 夫は子育ての大変さなど私の苦勞をわかっていない, 688

<p>3-2-2: 夫は子どもとよく遊び面倒見がよい (R), 620 3-1-08: この人と結婚して幸せである (R), 607 3-1-02: 夫と気持ちが通じ合っている (R), 568 3-1-11: 夫はほとんど家にいない, 550 3-2-1: 夫は子どもにあまり関心がない, 539 3-1-01: 夫と話し合う時間が少ない, 512 3-1-04: 夫は家事や育児に消極的である, 466 4-04: 家族としてのまとまりを感じる (R), 455 3-2-3: 夫は子どもをどのように扱ったら良いかわからない, 435 7-05: M幸せな気分で過ごしている (R), 427</p>
<p>第2成分: 4.702 (5.532%): $\alpha = .8629$ 7項目 (夫の心身不調) 8-03: F沈みがち, 819 8-05: F精神的に不調である, 805 8-07: F仕事に行きたがらなかつたり, やる気を失っている, 775 8-04: F悲観的である, 713 8-06: F仕事がかうまくいってない, 680 8-02: F淋しい, 613 8-01: F生き生きしている (R), 589</p>
<p>第3成分: 4.180 (4.917%): $\alpha = .8443$ 8項目 (育児困難感I <心配・困惑・不適格感>) 1-01: 育児に自信が持てない, 715 1-04: 子どもをうまく育てている (R), 630 1-14: 子どものことでどうしたらよいかかわからない, 612 5-05: どのようにしついたらよいかかわからない, 599 1-02: 育児についていろいろ心配なことがある, 580 1-06: 母親として不適格に感じる, 516 5-04: 子どものことは理解できている (R), 489 1-13: 私は子育てに困難を感じている, 475</p>
<p>第4成分: 3.925 (4.618%): $\alpha = .8498$ 7項目 (Difficult Baby) 9-02: Bよく泣いてなだめにくかった, 790 9-01: Bあまり眠らなかつた, 773 9-07: B抱っこや外に連れ出すなど寝るまでに手がかかった, 720 9-05: B一日の生活のリズムが一定しなかつた, 699 9-06: B一晩に何回も起こされた, 689 9-03: Bおとなしく手がかからなかつた (R), 638 9-04: B訳も分からず泣いた, 623</p>
<p>第5成分: 3.734 (4.393%): $\alpha = .8374$ 7項目 (育児困難感II <ネガティブな感情・攻撃衝動性>) 1-12: 子どもに八つ当たりしては反省して落ち込む, 728 1-07: 子どもを虐待しているのではないかと思う, 727 5-03: 何で叱られているのかわからないのに叱ってしまう, 648 7-04: M怒りっぽい, 641 7-02: Mイライラしている, 625 1-03: 子どものことがわずらわしくてイライラする, 534 1-06: 母親として不適格と感じる, 430</p>
<p>第6成分: 3.403 (4.004%): $\alpha = .8322$ 5項目 (母親の抑うつ傾向) 7-09: M心配性であれこれ気に病む, 808 7-08: M何事にも敏感に感じすぎてしまう, 764 7-07: M楽天的でよくよ考えない, 680 7-03: M悲観的になりやすい, 599 7-06: M気が滅入る, 543</p>
<p>第7成分: 3.262 (3.838%): $\alpha = .8011$ 5項目 (家庭機能の問題) 4-01: 家庭の中がしっくりいかない, 709 4-02: 何かと家庭内にもめ事が起こる, 697 4-03: 家庭には私の居場所がない, 599 4-05: 家庭内に心配事がある, 534 4-04: 家族としてのまとまりを感じる (R), 501</p>

表3-3
主成分分析と信頼性分析 (α 係数)

<p>2歳児 (n=188) 第1成分: 8.681 (10.094%): $\alpha = .9274$ 17項目 (夫・父親・家庭機能の問題) 3-1-06: 夫は私や子どものためによくしてくれる (R), 809 3-1-03: 夫は精神的に私を支えてくれる (R), 795 3-1-05: 育児のことで相談のってくれる (R), 784 3-1-08: この人と結婚して幸せである (R), 761 3-1-02: 夫と気持ちが通じ合っている (R), 722 3-1-09: 家庭内に関する事柄について夫には期待できない, 695 3-2-4: 父親としての自覚が足りない, 688 3-1-10: 夫は子育ての大変さなど私の苦勞をわかっていない, 678 3-2-3: 夫は子どもをどのように扱ったらよいかかわからない, 615 3-2-1: 夫は子どもに関心がない, 598 3-1-07: 夫は仕事や趣味だけに打ち込んでいる, 592 3-2-2: 夫は子どもとよく遊び面倒見がよい (R), 550 3-1-01: 夫と話し合う時間が少ない, 501 4-04: 家庭としてまとまりを感じる (R), 485 3-1-4: 夫は家事や育児に消極的である, 445 2-2: 妊娠中, 夫や家族の協力が得られなく大変だった, 417 4-01: 家庭の中がしっくりいかない, 415</p>
<p>第2成分: 5.858 (6.812%): $\alpha = .8878$ 9項目 (夫の心身不調) 8-08: F精神的に不調である, 857 8-09: F精神的にゆとりがない, 839 8-10: F仕事がかうまくいってない, 839 8-07: F悲観的である, 771 8-05: F沈みがち, 702 8-11: F仕事に行きたがらなかつたりやる気を失っている, 607 8-06: Fイライラしている, 594 8-02: F居場所がない, 486 8-01: F眠れない, 456</p>
<p>第3成分: 5.488 (6.382%): $\alpha = .8935$ 8項目 (母親の不安・抑うつ傾向) 7-08: M心配性であれこれ気に病む, 724 7-02: M悲観的である, 680 7-07: M何事にも敏感に感じすぎてしまう, 670 7-06: M楽天的でよくよ考えない, 669 7-05: M気が滅入る, 659 7-09: M不安や恐怖感におそわれる, 650 7-04: M何ともいえず淋しい気持ちにおそわれる, 645 7-01: Mイライラしている, 455</p>
<p>第4成分: 5.118 (5.951%): $\alpha = .9119$ 7項目 (Difficult Baby) 9-02: Bよく泣いてなだめにくかった, 865 9-01: Bあまり眠らなかつた, 853 9-07: B抱っこや外に連れ出すなど寝るまでに手がかかった, 815 9-06: B一晩に何回も起こされた, 809 9-03: Bおとなしく手が掛からなかつた (R), 778 9-05: B一日の生活リズムが一定しなかつた, 741 9-04: B訳も分からず泣いた, 709</p>
<p>第5成分: 3.808 (4.428%): $\alpha = .8371$ 6項目 (育児困難感I <心配・困惑・不適格感>) 1-01: 育児に自信が持てない, 758 1-15: 子どものことでどうしたらよいかかわからない, 698 5-06: どのようにしついたらよいかかわからない, 635 1-04: 子どもをうまく育てている (R), 627 1-02: 育児についていろいろ心配なことがある, 611 1-06: 母親として不適格に感じる, 578</p>
<p>第6成分: 3.372 (3.921%): $\alpha = .8160$ 6項目 (育児困難感II <ネガティブな感情・攻撃衝動性>) 5-03: 何で叱られているのかわからないのに叱ってしまう, 689 5-07: とめどなく叱ってしまう, 641</p>

1-13: 子どもに八つ当たりしては反省して落ち込む, 620
5-02: 子どものことを許せない, 556
7-03: M怒りっぽい, 546
1-07: 子どもを虐待しているのではないかと思う, 536

表 3-4

主成分分析と信頼性分析 (α 係数)

<p>3歳以上 (n=1086)</p> <p>第1成分: 8.432 (9.166%) : $\alpha = .9336$</p> <p>16項目 (夫・父親の役割問題)</p> <p>3-2-4: 父親としての自覚が足りない, 790</p> <p>3-1-06: 夫は私や子どものためによくしてくれる (R), 781</p> <p>3-2-2: 夫は子どもとよく遊び面倒見がよい (R), 758</p> <p>3-2-1: 夫は子どもにあまり関心がない, 747</p> <p>3-1-10: 夫は子育ての大変さなど私の苦勞をわかっていない, 734</p> <p>3-2-3: 夫は子どもをどのように扱ったらよいかわからない, 732</p> <p>3-1-05: 育児のことで相談にのってくれる (R), 713</p> <p>3-1-09: 家庭内に関する事柄について夫には期待できない, 696</p> <p>3-1-07: 夫は仕事や趣味だけに打ち込んでいる, 676</p> <p>3-1-04: 夫は家事や育児に消極的である, 657</p> <p>3-1-03: 夫は精神的に私を支えてくれている (R), 646</p> <p>3-1-08: この人と結婚して幸せである (R), 625</p> <p>3-1-02: 夫と気持ちが通じ合っている (R), 572</p> <p>3-1-01: 夫と話し合う時間が少ない, 476</p> <p>4-04: 家庭としてまとまりを感じる (R), 410</p> <p>4-01: 家庭の中がしっくりいかない, 403</p>
<p>第2成分: 5.258 (5.715) : $\alpha = .8864$</p> <p>11項目 (育児困難感I <心配・困惑・不適格感>)</p> <p>1-01: 育児に自信が持てない, 747</p> <p>1-06: 母親として不適格と感じる, 675</p> <p>1-04: 子どもをうまく育てている (R), 647</p> <p>5-06: どのようにしつけたらよいかわからない, 633</p> <p>1-02: 育児についていろいろ心配なことがある, 605</p> <p>1-15: 子どものことでどうしたらよいかわからない, 579</p> <p>1-14: 私は子育てに困難を感じる, 565</p> <p>5-04: 子どものことは理解できている (R), 490</p> <p>1-03: 子どものことがわずらわしくてイライラする, 479</p> <p>1-09: よその子どもと比べて落ち込んだり自信をなくす, 448</p> <p>1-05: 子どもを育てることが負担である, 413</p>
<p>第3成分: 4.474 (4.863) : $\alpha = .8869$</p> <p>7項目 (Difficult Baby)</p> <p>9-02: Bよく泣いてなだめにくかった, 840</p> <p>9-01: Bあまり眠らなかった, 815</p> <p>9-07: B抱っこや外に連れ出すなど寝るまでに手がかかった, 795</p> <p>9-06: B一晩に何回も起こされた, 766</p> <p>9-04: B訳も分からず泣いた, 758</p> <p>9-05: B一日の生活リズムが一定しなかった, 724</p>

<p>9-03: Bおとなしく手がかからなかった, 670</p> <p>第4成分: 4.163 (4.525) : $\alpha = .8750$</p> <p>7項目 (母親の抑うつ傾向)</p> <p>7-08: M心配性であれこれ気に病む, 773</p> <p>7-07: M何事にも敏感に感じすぎてしまう, 736</p> <p>7-09: M不安や恐怖感におそわれる, 677</p> <p>7-06: M楽天的でよくよ考えない, 638</p> <p>7-02: M悲観的である, 624</p> <p>7-05: M気が減入る, 582</p> <p>7-04: M何ともいえず淋しい気持ちにおそわれる, 557</p>
<p>第5成分: 3.300 (3.587) : $\alpha = .8219$</p> <p>7項目 (家庭機能の問題)</p> <p>4-01: 家庭の中がしっくりいかない, 635</p> <p>4-02: 何かと家庭内にもめ事が起こる, 633</p> <p>4-08: 家族の中で私だけがつらい思いをしている, 630</p> <p>4-07: 家族は子育ての大変さを理解していない, 617</p> <p>4-03: 家庭には私の居場所がない, 558</p> <p>4-05: しゅうとめなどの家族に干渉される, 547</p> <p>4-04: 家庭としてのまとまりを感じる (R), 454</p>
<p>第6成分: 3.265 (3.549) : $\alpha = .8031$</p> <p>7項目 (夫の心身不調)</p> <p>8-05: F沈みがち, 772</p> <p>8-04: F淋しい, 708</p> <p>8-07: F悲観的である, 652</p> <p>8-02: F居場所がない, 555</p> <p>8-08: F精神的に不調である, 491</p> <p>8-11: F仕事にいきたがなかつたりやる気を失っている, 481</p> <p>8-01: F眠れない, 436</p>
<p>第7成分: 3.143 (3.417) : $\alpha = .8511$</p> <p>7項目 (育児困難感II <ネガティブな感情・攻撃衝動性>)</p> <p>5-07: とめどなく叱ってしまう, 618</p> <p>1-13: 子どもに八つ当たりしては反省して落ち込む, 595</p> <p>7-03: M怒りっぽい, 585</p> <p>7-01: Mイライラしている, 534</p> <p>5-03: 何で叱られているかわからないのに叱ってしまう, 522</p> <p>1-07: 子どもを虐待しているのではないかと思う, 519</p> <p>1-03: 子どものことがわずらわしくてイライラする, 464</p>

注記: α : 信頼性係数 (α 係数)

- R: 逆転項目
- F: 父親・夫に関する質問
- M: 母親への質問
- B: 乳児期の質問
- W: 項目の重複
- 成分: 負荷量 (分散%)

(平成11年9月10日受理)